コラム

2011-02発行　明照幼稚園

こんにちは。園長の佐藤良文（さとうりょうぶん）です。今回は「お襁褓」について書こうと思います。これ、読み方が分かりますでしょうか。衣偏に強いて保つと書いて、「おむつ」なのです。私も数年前に知り、愕然としました。力強い字ですよね。

さて、今のオムツ事情を知ろうと思って、お店に行って驚きました。「新生児用」から始まってだんだん大きなサイズとなり、最後は「35kgまで大丈夫」と書いてあります。35kg？それは、何歳用ですか？

さらに調べてみたら、少し安心しました。その商品のクチコミを見ていると、小学生から高校生あたりまでの、緊急避難的に使われているようです。「転校の緊張感がきっかけで」等のごく個別的な事情のようで、「そういう用途なら」と安心しました。でも、面白いですね。「（高校生が）ワンポイントが可愛らしくて気に入っている」とか「（小学生が）兄弟がはいているのを見てはきたがる」というのは、個別の事情とは言え、私の感覚からはあまり理解できません。

それにしても、大きな子に対応したオムツがあるということは、親としても「もう、これ以上大きいのは使わないよ」という壁が消えたと言う意味で、助かったというよりも、**外すのが難しくなったのかな**、と思います。昭和３０年代、つまり今から50年も昔ですが、その頃の標準的な「外れ」の時期は、今より平均で半年位、早かったそうです。現状は一種の退化かも知れませんね。

一時は、「自然に外れるから、子どもが穿きたがれば、いつまでも」という論もありましたが、それは正直言って間違いだと思うのです。**オムツは大人の都合で穿いて貰っているものです。大人の責任で外してあげなければいけません。**

選ぶのも、長時間対応を目安にするのは良くないと思います。自分でトイレに行けるまでは、「排泄」は必ずコミュニケーションを伴うはずです。その間隔が長時間になるということは、それだけ親子の関わりの機会を減らしてしまうのです。「本人が不快に感じない」のは感覚を鈍らせることにも繋がります。

そう、体の神経の成熟はもちろん必要です（だから神経の問題で再発します）。しかし、それが出来た後では、**神経に情報を流すことをしなければ、しっかりセンサーが働きません。**人間は無駄な部分があれば削られてしまいます。

「溜まっている」というのと、「それを感知すること」は違う働きなのです。

オムツが外れる過程のなかには、当然「失敗」があります。しかし、他の事でもそうですが、**「失敗」自体が問題なのではありません。私たちも子どもの頃は、相当たくさん失敗して来たはずです。それへの対処をどうするか？、それこそが「親の見せるべき姿」ではないでしょうか。**「嫌な目に遭ってしまった」ことは、もう過去の事であり曲げられない事実です。そこにばかり目を向けるのではなく、「今後のために、今どうするか？」という指向をすべきでしょう。それが、「人生を楽しむ」に繋がると思います。

「オムツ外しをコミュニケーションとして捉える」というのは、素敵な考え方だと思います。**「トイレに行きたい」「はい、行きましょうね」とやり取りがあり、トイレで排泄できたという事は、清潔で気持ち良いばかりではなく、親子の絆作りにも大きく貢献すると思います。**子どもの成長を一緒に喜べる機会になるという事ですね。

今回のまとめです。

1．オムツを外すのは親の責任。こちらの都合でして貰っているのだから。
2．神経ができていないと感知できない。使わないと鈍い神経になる。
3．過去に固執しない。未来のために、今やることを考える。
4．「一人で出来た！」を一緒に喜べるのは親ならではの楽しみ。

ブログ書き続けています！

幼稚園内で見聞きした子どもの様子、行事で伝えたいことや、園長が日々生活している中で感じたこと、考えた事などを綴っています。読み返すと、我ながら結構な量になってきたと思います。携帯電話でも見られますので、よかったらどうぞお越し下さい。

明照幼稚園　URL　http://www.meisho.ac.jp

モバイル版　ブログ「園長の徒然」